年間第12主日 (2013/6/23 ルカ9章18-24節)

9:18 イエスがひとりで祈っておられたとき、弟子たちは共にいた。そこでイエスは、「群衆は、わたしのことを何者だと言っているか」とお尋ねになった。
9:19 弟子たちは答えた。「『洗礼者ヨハネだ』と言っています。ほかに、『エリヤだ』と言う人も、『だれか昔の預言者が生き返ったのだ』と言う人もいます。」
9:20 イエスが言われた。「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか。」ペトロが答えた。「神からのメシアです。」
9:21 イエスは弟子たちを戒め、このことをだれにも話さないように命じて、
9:22 次のように言われた。「人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、三日目に復活することになっている。」
9:23 それから、イエスは皆に言われた。「わたしについて来たい者は、自分を捨て、日々、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。
9:24 自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのために命を失う者は、それを救うのである。

＜前おき＞

「いった、いわない」誰しもこのような言い争いをした経験は

あるのではないでしょうか。たいていは水掛け論となって、双方、痛み分けという決着になりますが、時には、声の大きいほうに軍配があがることもあります。

ルカの福音とその続編である使徒言行録は、行間を読めといわれることがしばしばあります。行間とは書かれていないことの比喩ですが、書かれていないことを読み取ることを、ルカの福音を通してわたしたちは学ぶことになります。

＜きょうの福音＞

きょうの箇所は、「ペトロの信仰告白」と「最初の受難予告」の箇所です。マルコ８章 27-35 節やマタイ 16 章 13-27 節に並行した箇所です。

ルカ福音書とマタイ福音書は、マルコ福音書を基にしながら、少しずつ違う仕方で自分の福音書を書きました。

きょうは、マルコやマタイの福音書との違い、書いてあること、書いてないこと、に注目しながら、きょうの箇所を読んでいきましょう。

１．18 節　ひとりで祈っておられた

これはルカの特徴です。マルコ・マタイの平行箇所にはありません。ルカは重大な場面ではイエスの祈る姿を伝えています。

聖書と典礼 P5 下段参照

◆イエス、洗礼を受ける場面

3:21 民衆が皆洗礼を受け、イエスも洗礼を受けて祈っておられると、天が開け、

◆重い皮膚病を患っている人をいやす場面

5:16 だが、イエスは人里離れた所に退いて祈っておられた。

◆十二人を選ぶ場面

6:12 そのころ、イエスは祈るために山に行き、神に祈って夜を明かされた。

◆イエスの姿が変わる場面

9:28 この話をしてから八日ほどたったとき、イエスは、ペトロ、ヨハネ、およびヤコブを連れて、祈るために山に登られた。

◆「主の祈り」を伝える場面

11:1 イエスはある所で祈っておられた。祈りが終わると、弟子の一人がイエスに、「主よ、ヨハネが弟子たちに教えたように、わたしたちにも祈りを教えてください」と言った。

◆オリーブ山で祈る場面

22:44 イエスは苦しみもだえ、いよいよ切に祈られた。汗が血の滴るように地面に落ちた。

きょうの箇所でも（重大な局面）イエスは自分がなにものであるかを弟子たちに問いかけ、これからの歩みを告げるという重大な局面に際して祈っています。

祈りはイエスにとっては神からの指示？計画の再確認？なのでしょうか。

祈りはわたしたちもやります。イエスもまた祈る（わたしたちの祈りとは違っているのか、似ているのか）ということがルカでは強調されて記されているようです。

２．自分の「うわさ」（ペトロの信仰告白）

評判を弟子たちに訊ね、そのあと、弟子たちはどう思うかと問う。ペトロが「神からのメシア」と答える。

３．受難予告

22 節「人の子は…」と受難予告をする。

４．従うものは…

23 節でわたしに従うものの心得（自分の十字架を背負え）

2 番目の信仰告白からはマルコ・マタイの平行箇所と同じですが、ルカはやけにあっさりしています。というのは、ほかの福音書には書いてあることがルカでは大幅に省略されています。

＜ルカ福音書の大挿入と大割落＞ちょっと横道

最初にもふれましたが、ルカの福音書はおおむねマルコの福音書の順番どおりに書いてあります。それに付け加えて、マルコには書いていない記事、放蕩息子や善きサマリア人などがあります。これらの記事は 9 章 51 節から 18 章 14 節にまとまっていて、学者は「大挿入」と呼んでいます。

一方、マルコの記事を省略している箇所もあります。それも学者はあだ名をつけて「大割落」といいます。マルコの 6 章 45 節から 8 章 26 節の記事がルカにはありません。

マルコには書いてあることをなぜ著者は削ったのか？削ったということは著者はいらないと判断したからか、それともほかの理由があるのか、この疑問が残ります。

あたりまえのことですが、書いてあることにはコメントできま

すが、書いてないことを詮索することはできません。

<ルカ福音書の仕掛け>

分析的に「ペトロの信仰告白」をみると、イエスのうわさの部分がきょうの箇所のちょっと前にあります。

9:7 ところで、領主ヘロデは、これらの出来事をすべて聞いて戸惑った。というのは、イエスについて、「ヨハネが死者の中から生き返ったのだ」と言う人もいれば、

9:8 「エリヤが現れたのだ」と言う人もいて、更に、「だれか昔の預言者が生き返ったのだ」と言う人もいたからである。

このあと5000人の食事の記事となり、今日の箇所に続きます。今読んだ9:7の「うわさ」をはさんで「5000人の食事」があり、次いで、イエスは弟子たちにわたしは何者かと問いかけているという「うわさのサンドイッチ構造」にしたてています、仕掛けがあります。

この仕掛けはルカの大割落によってできあがっています。さきほど説明した「大割落」によって、このルカの「うわさサンド」ができあがっています。

参考「大割落」の見出し（マルコ6章45から8章26）

◆五千人に食べ物を与える（ここから）

◆湖の上を歩く（6:45）

◆ゲネサレトで病人をいやす

◆昔の人の言い伝え

◆シリア・フェニキアの女の信仰

◆耳が聞こえず舌の回らない人をいやす

◆四千人に食べ物を与える

◆人々はしるしを欲しがる

◆ファリサイ派の人々とヘロデのパン種

◆ベトサイダで盲人をいやす（8:26）

◆ペトロ、信仰を言い表す（ここまで）

ルカ福音ではこの部分をあっさり切り取って、人々のうわさ、評判とは違うイエス観＝メシアとしてのイエス、つまり、ペトロの信仰告白を引き立てて表現しています。またイエスの祈りのシーンを加えることによってことの重大さもしっかり表現しています。

＜書かれていないこと＞

マルコ・マタイにはあってルカにはない箇所は、ペトロに向かっていうイエスのセリフ「天の国の鍵を授ける」「サタン、引き下がれ」という場面です。

いずれも重要なことのように思えますが、ルカの福音ではこれらは省略されています。

＜最後に書き加え＞

23節「日々、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」

ここではルカは省略ではなく、書き加えをしています。マルコ・マタイにはない「日々」を加えています。

十字架とは死の比喩、暗喩です。人は二度死ぬことはできません。死は一生に一度のことです。マルコ・マタイにはない「日々」を加えることで、ルカは日々、イエスに従いなさいと

いう点を強調しました。

しかし、自分の十字架を日々背負う、つまり毎日死ねということ？ふつうに考えたらできません。

抽象的、観念的に十字架をイメージする、死をイメージする、殉教をイメージする、云々、このように十字架の比喩を観念化すればルカのいう十字架を背負うことは可能になります。しかし、それでは観念の遊び、頭の体操ていどにしかならないのでは。

マタイにはこのような福音があります。

> 疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしの軛を負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる。わたしの軛は負いやすく、わたしの荷は軽いからである（マタイ 11:28-30 ）

わたしは日々背負うなら、イエスの軛を負うことを選びます。

自分の十字架は一生に一度、そのときが来たら背負うものだと考えることではどうでしょう。

蛇足ですが、人の十字架を背負うことは人間にはできません。